

2020/09/06

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑭

『終わりの日について』 ヨハネ 5:19-29

### ✠ 驚き怪しむわざ

「そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それは、あなたがたが驚き怪しむためです。」(ヨハネ 5:19-20)

三位一体とは、それぞれ人格を持った神様が3人いらっしゃる、その思いが完全に一つであるということです。ですから、人間の側からすると一人の神にしか見えないのです。その三人の神とは、父なる神、子なるキリスト、聖霊なる神です。この三位一体の神は愛によって一つに結ばれています。愛とは、一つになろうとする運動のことです。そして、人は、神のいのちを貸し出されて造られているため、私たちも一つになろうとする運動をしています。人と人とが関わり合い、けんかをしたりするのは、そのためです。

さて、一つに結ばれている神は、これからさらに大きなわざをなさいます。「私たちが驚き怪しむため」という、そのわざとはいったいどのようなものなのでしょうか。

### ✠ 死人にいのちを与える

「父が死人を生きし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。」(ヨハネ 5:21-23)

私たちが驚き怪しむことの第一は死人を生きすということです。神はすべての人に永遠のいのちを与えたいと願っておられます。そのため、神はいっさいの条件をつけず、すべての人に御手を差し伸べておられ、人は誰でもその御手をつかめば救われます。つまり、イエス様は「私があなたを救う」と語っておられるのです。

父なる神と子なるキリストは、主従関係や上下関係ではありません。キリストは、父なる神が持っている権威をすべて持っており、父なる神と等しい存在です。また、「さばく」は「クリノー」というギリシャ語で、「分ける」という意味です。「すべてを分けることをイエス様にゆだねられた」とは、救いはイエス・キリストを通して分けられる、つまり「イエス様を

信じる者は救われる」という意味です。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

これが、驚き怪しむ具体的な内容です。この箇所を原文通り忠実に訳すと、次のようになります。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っています(現在形)。その人は、さばきに会うことがなく、すでに、死からいのちに移っているのです(現在完了形)。」

「驚き怪しむ」とは、「ほんとかなあ」と怪しむほど意外なことということ。つまり、「信じているあなたはもう復活してよみがえっている」と言われて、「ほんとかなあ」と「驚き怪しむ」ということです。

「死からいのちに移されている」とは「あなたは死んでいたが、すでによみがえっている」ということです。やがて必ず死に至る私たちは神の目からは死人です。しかし、救われた人は永遠のいのちが与えられ、肉体の死が訪れたら、そのまま天国に行くことができます。

このことは目に見えないため、私たちは、イエス・キリストを信じた後も、自分はまだ救われていないのではないかと不安になることがあります。しかし、「信じているならば、あなたはすでに永遠のいのちを持っている」と、イエス様は言い続けておられます。ヨハネの福音書の中で、永遠のいのちは未来に受け取るものだと書かれている箇所は一か所もありません。すべて現在形です。「私たちの中に神の国が来た」「私たちは神の国のただ中にある」「私たちは神の神殿である」「私たちの内に御霊が住んでいる」等々、さまざまな表現で、私たちの内にすでに永遠のいのちがあることが語られています。

私たちが受け取った霊のからだは、神の国に属するものです。私たちはまず潜在意識の中で永遠のいのちを受け取り、その結果、イエス・キリストを信じるができるようになったのです。知らない方を求めることはできません。私たちが、神に対して「アバ父」と祈ることができるのは、すでに神を知っていた証だとパウロは述べています。

## ✠ 永遠に生きる道

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

私たちは生まれながらの状態では神を知らず、そのままで滅んでしまいます。そのため、自分では生きていると思っているかもしれませんが、神の目からは死人です。その死人がイ

エス・キリストによって生きるようになったのです。

この世界は時間の流れに沿って動いており、私たちはその流れの終わりが来ると滅んでしまいます。時間の流れから離れ、静止することが本当に生きるとういことです。しかし、この世界は、時間の中でとどまることはできません。それで、すべての人は、自分はこのままどこに行くのだろうかと不安を抱えています。その不安を解消するために、過去の思い出をふり返り、一時的に時間を止めた状態を味わったりもしますが、それは現実ではありません。

私たちが静止することができる唯一の方法は、時間の流れの外から投げ込まれるロープにつかまることです。それがイエス・キリストです。イエス・キリストの御手をつかむことで、滅びに向かう流れから救われて静止し、生きるものとなることができます。イエス様は、「今、そのロープをつかむ時が来た。つかむものは生きる。」と言っておられます。これが神のさばきです。「さばき」とは、キリストによって滅びから分けられ、死からいのちに移ったということです。それが「父はすべてのさばきを子にゆだねた」ということです。

「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」(ヨハネ 5:26)

神は永遠性で、時間にも空間にも左右されない方です。ですから、神であるイエス・キリストがこの地上に来るためには、有限性の世界の制約を引き受けなければなりません。つまり、肉のからだを引き受けられたということです。そして、同時に、三位一体の神と交わることでできる永遠のいのちも持ってこられました。イエス様は私たちにも同じいのちをお与えになります。神の福音の本質は、いのちを与えるということです。神がイエス様に初穂として永遠のいのちを持たせ、そのいのちによってイエス様は十字架で復活しました。その同じいのちを私たちに持たせてくださるのです。

## ✠ 終わりの日

「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」(ヨハネ 5:27-29)

「人の子」とは、旧約聖書のダニエル書に記されている、預言された救い主のことです。「墓の中にいる者が救い主の声を聞いて出てくる」とはどういうことか、聖書は「終わりの日」についてどう教えているのか、考えてみましょう。

「終わりの日」についての考え方を「終末論」と言いますが、これには大きく二つの解釈があります。一つ目は、「この世界の歴史が終わるとき」という解釈です。亡くなった人達はその時まで中間場所(神を信じた人はパラダイス、信じなかった人はハデス)で待機しており、終わりの日にキリストが再臨し、それらの死んだ人をいっせいによみがえらせ、最後の審判

を行い、天国に行く者と地獄に行く者とを振り分け、神が新しい国を造ってくださって、神の国は実現するというのです。これが、旧約時代からの伝統的な解釈です。

しかし、聖書を読むときには、文脈を理解しなければ正しく理解することはできません。特にこのような抽象的なことが述べてられているときには、同じことを別の表現で言い換えるという手法が頻繁に使われています。一か所だけを字義的に読み取って解釈を加えてはならないのです。ここは重要な箇所ですから、イエス様はいくつかの箇所でも言い換えをしておられます。

「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ 6:44)

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、さばきに会うことがなく、すでに、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:24-25)

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行った者は、よみがえっていのちを受け、悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」(ヨハネ 5:28-29)

イエス・キリストは、終わりの日とは、神が人をよみがえらせる日のことであり、それは、「今だ」と言っておられます。将来よみがえる、とは一言も言っておられません。これは、当時の人々の思い込みに配慮し、正しい理解を教えるために言い換えをしたものです。つまり、「墓の中にいる者」とは死人である私たちのことであり、「善を行う」とは、次の御言葉が示す通り、神のことばを信じることです。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:28-29)

以上のことを踏まえると、イエス・キリストは、「神の言葉を信じる者は、よみがえっていのちを受ける」と言っておられることがわかります。これは、原文では「いのちのよみがえりに至る」と書かれています。つまり、「信じる者はいのちのよみがえりに至り、信じなかった者は裁きのよみがえりに至る、それは今だ。」ということです。

聖書が言っているよみがえりの日とは、死からいのちに移されるときのことであり、それは今です。死んだら中間地点に行き、終わりの日まで待つわけではありません。さらに聖書を注意深く読むと終わりの日は2度あると書かれていることがわかります。1度目は、死ん

でいた私たちに永遠のいのちを与えられた日であり、2度目はこの肉体が滅びる日です。その日、私たちは肉の体から脱皮して、すでに着せられていた霊のからだによみがえるのです。それが書いてあるのが黙示録です。

この世の常識を基準に聖書の言葉を理解しようとしても、正しく理解することはできません。大切なことは、イエス・キリストは何と言っておられるかということです。

この世の時間の概念を基準にして終わりの日を理解しようとする、強引な解釈をせざるを得ません。しかし、はっきりしていることは、イエス様は「神の国は来た。」「あなたがたは今神の国のただ中にいる。」と言っておられるということです。これが最も重要です。「時間」という従来の考え方にしばられて、神のことばを驚き怪しんだため、様々な説が生まれましたが、そもそも神は時間に支配されない方です。ですから、時間の中に神の国が樹立することはありえないのです。

この世界はいずれにしても滅びます。いつかは太陽が尽き、宇宙には寿命があることは誰もが知っています。しかし、神はそういうことを問題にしているのではなく、人は生まれながらに死んでいるということの問題にしているのです。

私たちは神の御手につかまらなければ、生きる者になれません。そして、イエス様を信じたその時、私たちは生きる者となり、永遠のいのちを持ちます。その時、私たちはすでによみがえったのです。そして、地上での体が滅んで天に引き上げられる時、私たちは2度目のよみがえりを体験します。神から永遠のいのちを受け、よみがえった人は、この地上で死んだらまっすぐ天に引き上げられますから、何も心配することはありません。だからイエス様は黙示録の中で、「私はすぐに来る」と言われました。この地上での人生は短いからです。

私たちは、死後、眠りについて墓の中で待たされるわけではありません。この件について、イエス様が語られた「金持ちとラザロ」の話がよく引用されますが、それはたとえか事実かを見分けることが重要です。この話の中で権威を持っているのは父なる神ではなくアブラハムとされていることから、これは事実ではなくたとえと理解すべきです。つまり、生きている人たちへのたとえを使ったメッセージであって、字義通り受け取るものではないということです。

## ✠ 永遠のいのち

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、さばきに会うことがなく、すでに、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:24-25)

イエス様が「まことに、まことに」と繰り返して言っておられるのは、本当に重要なことだからです。それは、神の呼びかけに応答する者が生きる者となり、あなたはもう応答して、永遠のいのちを持っている、ということです。だから私たちは、この世界がいつ終わるか心

配する必要はありません。あなたにとってはこの世界はもう終わっています。パウロは「私はこの世界に対しては死んだ者だ」と語り、次のように言いました。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

「あなたは復活して古いものは過ぎ去り、キリストにあってすべてが変えられた」、これこそがイエス様が伝えたかった最も重要な福音です。これらのことをあなたがたに示すとあなたがたは驚き怪しむが、これが真実なのだと伝えておられるのです。ヨハネは手紙の中で次のように述べています。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」(Ⅰヨハネ 5:13)

ヨハネは、「信じている者は、永遠のいのちを持っている」と一貫して書いています。つまり、私たちにとって死はもうないということです。私たちはすぐ天国に引き上げられるのですから、肉体の死は私たちにとって通過点です。死後にさばきが行われるわけではありません。このことを知って、恐れることなく希望を持って生きていきましょう。

実は、このような神学が定着したのは、20世紀になってからのことです。ドットという人が書いた「神の国」という本に衝撃を受けた神学者達が、私たちは聖書を読み間違えていたのではないかと気づき始めて、新しい解釈が生まれ、それ以降、終末論は伝統的な解釈とイエスの言葉に基づいた新しい解釈とに二分しました。

今も伝統的な解釈に立つ人もいますが、イエス様のことばに基づくならば、「終わりの日」「終末」とは、今です。あなたがイエス様を信じて受け入れるなら、その時あなたはよみがえる、未来の話ではなくすでによみがえっているのです。そして、行いに関係なく、永遠のいのちを手にした者は、救いを取り消されることはありません。これが神の救いです。放蕩息子のたとえの中で、たとえ私たちが気づいていなくても、「私はあなたといつも一緒にいる」と神は語っておられます。神の福音とはそういうものです。

あなたにとって終わりの日はもう来ました。あなたはこの世界に対して死に、そして生きる者になりました。今私たちは神と共に生きるものとなったのです。終末を心配して惑わされる必要はありません。あとはあなたがこの地上でどう生きるのかということだけを考えましょう。

イエス様を信じている人、神の呼びかけに応答した人は、もう永遠のいのちを持っていて、すでに神の国に入れられているのだから、恐れたり心配したりすることなく、感謝して生きていきましょう。これが、イエス様が語っている福音です。